

# ギゾーの *Histoire Général de la Civilisation en Europe* をめぐる 交流と伝播

—C.S. ヘンリーに英訳されるまで—

河田 敦子

本研究は、19世紀半ばフランスで政治家・歴史家として多方面で活躍したギゾーのソルボンヌ大学における講義 *Histoire Général de la Civilisation en Europe* (1828)<sup>1)</sup> が、1842年米国でC.S. ヘンリーに英訳されるまでの米仏の知識人の交流を調査することにより、civilisation 思想が国際交流に果たした役割およびギゾーの同思想伝播への関与について明らかにすることを目的としている。研究方法として、1828年～1842年頃における同講義をめぐる人間関係についてハーバード大学ホートン図書館所蔵スパークス文書を調査した。その結果、ギゾーの同思想伝播における積極的関与をトクヴィル、スパークス、ティクナー等との交流の中に認めた。同講義は、多くの人々に感銘を与えつつも、トクヴィルとの政治的対立やスパークスの著書翻訳の遅延等の問題を生じさせながら、教科書として伝播したことを本研究は明らかにした。

キーワード：ギゾー civilisation スパークス ティクナー C.S. ヘンリー

## はじめに

本研究の目的は、19世紀半ば未だ国際的交流がスムーズではなかった時代に、「civilisation」<sup>2)</sup> 思想を学ぼうとする国際交流力がどのように生成され、更にその力によってどのように人が動き成長していったかを、ギゾーの *Histoire Général de la Civilisation en Europe* (1828) の伝播の経緯を事例として考察することである。同著は、1828年にギゾーがソルボンヌ大学で行った講義がそのまま刊行されたものである。本稿では、この同名の講義も同著の影響の中に含めている。

ギゾーは civilisation を「社会の進歩と人間性の進歩」として西欧社会に普遍的に見られる事象としてヨーロッパ史を読み解いた。彼は、「社会の進歩とはまさしく、一方においては、個人の意志の代わりに公の権力を置くことであり、他方においては、個人の抵抗の代わりに合法的抵抗を置くことである。これこそ社会秩序の大きな目的、主要な完成である。」(ギゾー 2014 81)、「公共的と呼ぶ制度」について「超越性、普遍性」が密接不離であると述べ(ギゾー 2014 79)、「公の権力」や「公共性」が社会の進歩に最も重要な役割を果たすとし、その「公共性」を、個人を超越したところに位置付けた。同著からは、①「政府は個人の内面には関与しない」(ギゾー 2014 98)、②「人間精神の(宗教からの)解放」(ギゾー 2014 227)、③「不調和、多様性、闘争への理解」(ギゾー 2014 98)、④森有礼の「自他並立論」を連想させる理論(ギゾー 2014 55)等、近代日本教育政策に強い影響を与えた理念が読み取れる。

筆者は、フランス公教育史を研究しながら(河田 2019a, 2019b)、同著が1860年代から1870年代に

かけて日本の政治および教育思想に与えた影響を研究するようになった。前述のように同著は、1828年にギゾーがソルボンヌ大学で行った講義がそのまま刊行されたものであり、1838年にその英訳が訳者不明のままロンドンで刊行され、1842年にニューヨーク大学教授 C.S. ヘンリー (Caleb Sprague Henry) による英訳がニューヨーク・アップルトン社から出版された。同著は、1840年から2009年の間に、世界中の554のWorldCat加盟図書館で保有され73回版を重ねている<sup>3)</sup>。日本では1875年に室田充美が仏語原本を『西洋開化史』として邦訳し、西周が校閲、荒木卓爾・白井政夫がヘンリーの英訳書(1848)を和訳した『泰西開化史』を1874年に刊行した。永峰秀樹がヘンリーによる英訳書を1874年9月から1877年3月まで『欧羅巴文明史』として和訳刊行した。福沢諭吉の著書『文明論之概略』(1875年)は、ヘンリーによるギゾーの英訳本とバックルの『英国文明史』の文明思想に基き、日本や中国の文明論を展開した著作で、明治期の知識人に広く読まれた。現代でも福沢の同著は、丸山真男が『「文明論之概略」を読む』で論及し、ギゾーの同著は2014年にみすず書房から新装復刊され、注目され続けている(ギゾー2014)。

他方、ギゾーが日仏交流の端緒を開いた意図と幕末日本に与えた影響に関する研究は少ない。ギゾーは、ローレンス・オリファント著 *Narrative of The Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the Years 1857, 58, 59* (1859) を仏訳し、1860年に *Le Chine et Le Japon* を刊行した。その序文の冒頭で、自らがラグルネに中国・日本へ使節団を送ることを命じたと記している(Guizot 1860、ポラック 2002 16)。彼は、1843年時点でアジアにおけるフランスの拠点としてインド、中国および日本に着目し、civilisation と morale を伝播することに意欲的であった。1848年に政界引退後、1857年時でもアジア社会に対して「世界はキリスト教とヨーロッパの civilisation に属している」という強い信念を持ち続けていた(Guizot 1884 362)。その是非はともかくとして、本研究は、ギゾーが外相として世界的な civilisation の伝播に意欲的であったことを示唆し、それをどのように実現しようとしていたのか、さらにそれがどのようにヘンリーの手に渡り翻訳されたのかを明らかにしたい。すなわち、civilisation の思想伝播は単なる流行現象ではなく、発信者の意図に基づき、その政治家としての力量と歴史家としての世界史への洞察と未来への信念が、彼に関わった人々の交流を産み、伝播したのではないかという仮説を検証する。

研究方法としては、ギゾーに関する資料・研究において1828年～1842年頃における *Histoire Général de la Civilisation en Europe* に関連のある人間関係を調べた(Theis, Witt, Adams, Craiutu, Jardin, Ticknor)。その結果、トクヴィル (Alexis de Tocqueville)、スパークス (Jared Sparks)、ティクナー (George Ticknor) 等が、ギゾー、ヘンリーの両者に関わりがある可能性があることがわかった。これらの人々に関する第一次資料として、ハーバード大学ホートン図書館所蔵の J.Sparks 文書を調査した。

尚、本稿では、紙面の都合上、ギゾーの同著がヘンリーに翻訳されるまでの人々の交流を描き出し、それ以降幕末日本への輸入については別に論ずる。

## 1. 先行研究の検討

ギゾーは、1832年から37年まで公教育大臣、1840年から47年まで外務大臣、1847年から1848年にかけて首相に就任した。首相として制限選挙による特権階級中心の政治を行い、1848年2月革命を招き、失脚した。失脚の原因は、ギゾーが「選挙権が欲しければ金持ちになりたまえ」と言い、制限選挙によって行政機構から貴族を排除し、ブルジョワジーを導入し、民衆の猛反発を受けたためと言われている(小田中 174, 403)。この失政のために、ギゾーに多くを学んだと公言していたマルクスもギゾー批判に転じた(尾崎 47)。小田中直樹は、ギゾーのこの言葉は、「『金持ちでなければだめだ』を意味する一方で、『誰でも金持ちになれる』をも、その可能性の大小は別として意味する。」と捉え、ギゾーの言葉を一概に一般民衆の排除とは捉えていない(小田中 284-285)。ギゾーに関する研究で、多方面から第一次資料

に基づき詳細に研究していると高く評価されているのがD. ジョンソン (D.Johnson) の *Guizot-Aspects of French History 1787-1874* である。同研究はその後の多くのギゾー研究に影響を与えた。ジョンソンは、「ギゾーは人気が無かった。ギゾーが *civilisation* の講義をした時は尊敬を以て扱われたが、それは彼の人生では例外的だった」(Johnson 11-12) と記している。ジョンソンは、ギゾーの外交政策について、ギゾーの選択の余地はほとんどなかったと指摘している。M. ヴァレンシス (M.Valensise) が編集した論文集 (Valensise 1991) では、複数の論考で、ギゾーの外交における関心は「ティエールとは異なり、ギゾーはナポレオンの伝説に執着していない。過去の英雄は現在の野心を導くことはできない。彼の想像力を養うのは戦場の栄光ではなく、文化と *civilisation* の相互作用なのだ。」(Bullen 188) と述べている。ギゾーは、外交政策では素人であり、ヨーロッパにおけるバランス外交、婚姻による同盟等、複雑を極めるヨーロッパ外交に対しギゾーは特に関心が無く、むしろ、アジアに目を向け、インド、中国へのフランスの影響力拡大に意欲的であったと、複数の研究で示唆されている (Johnson 292-293, Poulot 268, Bullen 190)。

他方、西川は、「文明概念は植民地主義と結びつく可能性がある」と文明論を批判的に捉えている (西川 492)。西川は、こうした植民地主義に批判的な考えを持っていた人物としてスタンダールを取り上げ、彼とギゾーとの関係について、無名時代のスタンダールはギゾーの熱心な読者であったが、1812-1813年の日記ですでにギゾーを「剽窃者扱い」し、1830年代以降、外交官としてギゾー大臣の一部下となると、更に強い反感を示すようになったという (西川 491-509)。スタンダールは、「文明」という「欺瞞的なイデオロギー」、「美しく装われたナショナリズム」に対し、「異議を唱え、(中略) 意識的・無意識的に時代のイデオロギーを超えようとしていた」と西川は述べている。

マルクスのギゾー批判を読んだ後にギゾーの同著を読んだ丸山真男は、ギゾーに対して「悪いイメージ」を持っていたが、政治家ギゾーと歴史家ギゾーとは区別して考えねばならないと考え直し、福沢を含め明治期の知識人は政治家ギゾーについてはほとんど無知のまま、同著に接したように思われるので、政治家ギゾーに関連付けずに「維新直後の歴史的文脈のなかでのギゾーをかえって見失わせることになる」という姿勢で同著と福沢の『文明論之概略』を読み解いている (丸山 8-9)。丸山は、福沢の「文明とは主権的国民国家を造ること」という理解、とりわけ福沢の「外国交際」という言葉に深い洞察を示し、「外国交際」とは、『西欧的国家システム』と言われている近代国際社会に日本が自主的に加入する」と捉えている。「結果的に20世紀のはじめまでに西欧的国家システムに、自らの独立を失わずに構成員となることに成功したのは東アジアで日本だけだった。」(丸山 250-272) と指摘しながら、福沢が「脱亜論者」とのみ評価される傾向に再考を促している。

後平隆は、ギゾーと福沢とトクヴィルの思想について考察している。福沢とギゾーとの相違は、ギゾーの「人間精神の自由な探究」に対する福沢の認識の弱さであると指摘している。また、ギゾーに対してトクヴィルが抱いた、制限選挙によって排除された階層の「怨恨と反発」への政治的対応の困難さに近い心情を、福沢は不平士族に対して抱いており、福沢はギゾーよりもトクヴィルに思想心情的に近かったと論じている (後平 2008, 2009, 2011)。トクヴィルは、こうした排除された階層の問題の原因は「公共心」を育てることの困難さにあると考えていたという (後平 2011 30)。後平は「正当なる主権はあくまでも超越的なものであり、人間にはそれを追求することができないというのがギゾーの根本命題である」が故に、ギゾーの政策は「神の契約」を中核に置く代議制に依拠する立憲王政しかあり得なかったと述べている (後平 2002 115, 120, 122)。

前述のギゾーとヘンリーに関わりがあった人々として挙げた、J. スパークスについてはアダムス (Adams) (1893)、トクヴィルについてはクライウトウ (Craiutu 2009)、ジャルダン (Jardin 1988)、マンシーニ (Mancini 2006)、ティクナーについては日記書簡 (Ticknor 1876) 等がある。これらについては本文中で言及する。

以上のようにギゾーについては政治史の分野で研究が継続され、評価が多様化している。しかし、教育史の分野ではギゾー法について研究されているものの、その *civilisation* 思想については、福沢諭吉を媒介とした啓蒙思想の一つとしては研究されているが（安川、梅津）、ギゾー自身による *civilisation* 思想伝播への関わり方や与えた影響という側面については研究されていない。

## 2. ギゾーについて

ギゾーは、1787年、ニームで生まれた。彼の祖父母は、1700年頃にイギリスからフランスに逃れてきたプロテスタントであった。父親は、フランス革命期にジャコバン派によって絞首刑となった。1799年、家族でジュネーブに移住。1812年、文筆家ポリーン・ムーラン嬢と結婚。その直後パリ大学文学教授となる。1827年8月1日、ポリーン病没。1828年4月より7月までソルボンヌ大学で *Histoire Général de la Civilisation en Europe* の講義開講。11月8日、ポリーンの姪、エリザと結婚。12月よりソルボンヌ大学で *Histoire de la Civilisation en France* の講義を開講。同年1月、ボンエヴェック区とリジュウ区の統合区の選挙にノミネートされ、政界へ進出。同年、ルイ・フィリップ王政下内相就任。1832年8月、スールト内閣発足。公教育相となる。1833年1月、エリザとの間に第2子誕生（第1子は出生後まもなく死亡）。3月11日、エリザは、フランソワ、ギョーム、ヘンリエッタ、ポリーンの4人の子どもを残して死去。1835年、モレ新内閣発足。1837年2月15日、長子フランソワ死去。1837年4月、ギゾー公教育相を辞職。この時期に、後述するスパークスから依頼された *Life and Writings of Washington*（以下 *Washington* と略記する）の序文を執筆する喜びを味わっていたという（Witt 181）。1839年、デュシャテル内閣に招聘される。1840年2月20日、緊張が高まるヨーロッパ情勢に対応するためロンドン在英フランス大使を命じられる。1840年5月、ティエールを首班とする内閣発足。同月21日辞職。王はギゾーを信頼して組閣を命じた。ギゾーはイギリスに留まることを決意。1840年10月、パリへ戻る。10月29日、ヨーロッパ情勢が落ち着く。ギゾー外相になる。1847年、首相になる。1848年2月革命勃発、ギゾー失脚。フランスから追放され、ロンドンへ。以後歴史研究に没頭。1874年、死去（Witt 216）。

## 3. *Histoire Général de la Civilisation en Europe* をめぐる交流

### 3-1 ギゾーとJ.スパークス

J.スパークス（1789～1866）は、ハーバード大学教授、学長。ギゾーに自著 *Washington* の仏訳を依頼した経緯があり、ギゾーとは親交があった。スパークスは、ウィリントンの貧しい家に生まれた。学業成績が優秀で、将来を有望視されたが、大工をして生計を立てざるを得なかった。しばらくしてトーランドで教員資格を取り、臨時の代用教員をしていたが、期限が来て再び大工に戻った。その後、ルミスという牧師にその才能を見出され、私立学校の教師となり成功への糸口をつかんだ。1809年コネチカット州に移り、奨学生となってアカデミーで学んだ。1811年、ハーバード大学入学。1815年、同大学卒業。1824年 *North American Review* の単独編集者となる（Mayer 3-7）。1825年、American Academy of Arts and Sciencesの委員に選出される。1828-1829年、欧州に調査旅行。1831-32年、トクヴィルとボーモンのアメリカ調査を受け入れた。1835年ティクナー（後述）からハーバード大学へ就職の誘いを受け、1838年、ハーバードカレッジ歴史学教授。これは、アメリカの大学で初めて認められた歴史学の専任教授ポストだった。1840年、2回目の欧州調査旅行。1843年、ハーバード大学より博士を授与。1849年 ハーバード大学学長となった。ジョージ・ワシントン、ベンジャミン・フランクリン、モリス等の人物研究が多い。

ギゾーとスパークスの関係については、アダムスがギゾーとスパークス、ティクナーとの往復書簡等をもとに、詳細な研究をしている（Adams 1893a,b）。スパークスは、1828年4月に初めてのヨーロッパ調査旅行に出発し、4月15日リバプール、24日ロンドン、6月16日ブリュッセル、23日ゲッティン



ゲンを経て、7月9日パリに到着した。これは、自著 *Washington* の独語と仏語の翻訳者を探すための旅だった。スパークスのギゾーとの出会いは、1828年8月6日、スパークスが直接ギゾーに自著 *Washington* の仏語訳を依頼するところから始まる (Adams 1893b 99)。1828年7月26日付けの手紙で、スパークスは、ラファイエット少佐にギゾーに仏訳を依頼したい旨を伝えた (Adams 319)。スパークスは、ギゾーが既に *History of the English Revolution* を出版し、シェイクスピアの仏語訳の編集にも関わっていることを知り、ギゾーに自著の仏訳を依頼したのである。ギゾーは、スパークスの依頼を、その著書の序文を自身が執筆することを条件に快諾した (Adams 1893b 99)。スパークスは、この後幾つかの古文書館を訪れ、資料収集に精力的に取り組んだ。この古文書館調査時にトクヴィルと出会ったと幾つかの資料で指摘されている。

1828年、ギゾーは、ソルボンヌ大学で後に著書 *Histoire Générale de la Civilisation en Europe* として刊行される講義を4月から7月にかけて開講した後、12月には第2の講義 *Histoire de la Civilisation en France* を開講した。12月25日の日記にスパークスが同講義を聴講したと記している。文学のヴィレマン、哲学のクーザンの講義も同時に開催され、講内は2千人の人であふれていたという。スパークスは、ヴィレマンとギゾーと共に食事をした。そこでパリの主だった学者たちに出会って良い刺激を受け、尽きない情報と社交の機会を得たとスパークスは述べている (Adams 1893b 118-119)。彼は、ギゾーの講義を聴き、ギゾーに自著の仏訳を依頼する気持ちを更に強くしたようである。その後、12月26日にパリを立ち、翌年1月3日にロンドンに到着した。

ハーバード大学ホートン図書館には、スパークスの1832年1月1日から1840年8月までの日記が所蔵されている。ギゾーとスパークスは、1837年からかなり親しい関係にあった。スパークスの研究にギゾーは惜しめない援助とフランスでの調査協力を申し出て、実践した。1839年9月のスパークスの日記には、ギゾーが1837年ごろからスパークスの著書の仏語訳を、ティクナー (George Ticknor (1791-1871)) ボストン市民図書館の創立者の一人。ハーバード大学でスペイン・フランス語と文学および文芸学の教授) を通じて調整し、自らが序文を執筆して刊行しようとしていた旨が記されている。しかし、1828年に依頼した翻訳が1837年になっても刊行されていなかったことに、スパークスはかなり苛立っていた。アダムスは、スパークスは、ギゾーが *Washington* の序文を執筆することを政治的に利用するために引き受けたのではないかと疑う側面があったと示唆している (Adams 1893b 329-330)。スパークスは、1837年8月7日付ティクナー宛の手紙で、「ギゾー氏は、翻訳を引き受けてから何の連絡もくれないが、仏訳本刊行が遅れていることを私に相談すべきである。有効な方法はあったはずである。トクヴィルも少なからず(翻訳)に関心を示したであろう。」 (Adams 1893b 321) と述べている。

筆者がハーバード大学ホートン図書館で調べたところによると、1835年6月22日、スパークスは、ティクナー宛に以下に示すような仏訳者をギゾーとは別の人物に変更したい旨の手紙を出した。ティクナー (1791～1871) はボストンに生まれ、スパークスと同様ハーバード大学の教授であり、当時としては稀な程長期にわたるヨーロッパ旅行を経験し、ヨーロッパに幅広い人脈を持っていた (Ticknor)。

7年前、私がヨーロッパにいたとき、私はセーフエルドと契約して、ドイツ語訳の準備のためにワシントンの文書から選択したものの翻訳をしました。フランスについてはギゾーに同じことをして欲しいと考えていました。セーフエルドは亡くなり、ギゾーは大臣になりました。これらの紳士たちとのそれぞれとの取り決めは頓挫しました。私はギゾーに手紙を認めていませんが、彼の公人としての地位を考えれば、彼がそのような事業については何もすることができないと思います。あなたは他の有能な人を見つけることを約束してくれますか？ドイツの教授ならば難しくはないでしょう。(河田訳)

とある。これに対し、ティクナーは、同年8月7日に「新たなアレンジメントをするには遅すぎる」と

返信した。その後何度かのやり取りがあったようであるが、確かなことがわかる書簡は残されていない。

ここからは Adams の著書からの引用である (Adams 319-333)。1837 年 11 月 13 日、ティクナーはパリで、スパークス宛ての手紙を執筆した。「私は、2 か月前に、あなたからギゾーに自著 *Washington* の仏訳を急ぐように伝えてくれという内容の 8 月 7 日付の手紙を受け取った。しかし新たな本が届くまでは何もしないようにと添書きがあり、その追加本は、10 月 20 日に届いた。ギゾーが貴君の本の翻訳者として最適任者であることは間違いない。私は足しげく彼の所を訪問して進捗状況を訊いた。かれは「私は何も欲していない」と述べつつ何も着手されていなかった。(中略)

そこで私は、彼に手紙を認めた。

11 月 9 日

親愛なるギゾーさん

スパークス君は、*Washington* の翻訳について、下記の 4 つの条件を付けることを望んでいます。

1. *Washington* は、11 巻全てを完訳していただきたい。
2. ノートや注等新たに加筆する内容は、その旨明記していただきたい。
3. 2 つの言語のイディオムと文字の違いが許す限り、文字通り正確に翻訳すること
4. あなたの名前が、フランス語の翻訳と出版に責任を負う唯一の名前としてタイトル ページに表示されること

スパークスは上記の事柄について準備ができており、できることは喜んでですと言っています。

あなたがフランスでの出版を引き受けることに同意したことを知って、彼がどれだけ喜んでるか私は既に承知しています。なぜなら、あなたの名前は、この点で彼がすべての義務を果たした彼の国への最高の忠誠の証となるからです。これを保証するために、私が送信できる範囲でこのメモへの回答をお願いします。 G.T.

これに対しギゾーは、「私はそれを翻訳し、この版に私の名前を入れます」と、その条件を承諾する返事をティクナーに託した。ティクナーはこの手紙をスパークスに示しつつ「ギゾーの名前が無かったらフランスでは出版できそうにない。彼は、出版業者からいかなる報酬も得ていない。彼は名誉のために翻訳をしているのだ。」と記している。スパークスは、1838 年 1 月 15 日、ティクナーの仲介に感謝の言葉を述べつつも、次のように返信した。

ギゾーとの交渉を成功させて下さり、感謝します。しかし、ギゾーは、1828 年に翻訳を依頼した時は、それ自体喜んで引き受けてくれていた。彼の公的地位や職務を考えても、このようなことになることは思いもよらない。私はこれからすぐにギゾーに手紙を書いて、2,3 私の思うところを伝えたいと思う。貴方の手紙は十分にその意を伝えていると思うので、私は何も申し上げることは無いが、全てを彼の判断に委ねたいと思います。

ティクナーはこのスパークスの手紙に対し、1838 年 5 月 26 日に次のように返信した。

本当の所、ギゾーは、出版社を見つけることに、私が想像しているよりもはるかに難渋しているのだ。私がパリを發つ 10 日前に、彼はある出版社から 4 巻で彼のイントロダクション 50 ページという提案を受けていた。・・・(中略)

もし、ギゾーの名前が無ければ、フランスで名乗りを上げることはできない。だから、貴君がこういう場合にできることを何でもしたと彼が思えるようにあなたが送ってくれた両方のコピーを彼の手

に残しました。

こうしたやり取りの後、1840年ギゾーの171ページに及ぶ序文を付した *Washington* 4巻が刊行された。しかもその表紙に記載されていたのは、ギゾーの名前のみでスパークスの名前は無かった。フランスとカナダでは、スパークスの著作はギゾーの著書として知られたのである。スパークスの名前は同序文中にも一度も出てこない。

ギゾーは、*Washington* のイントロダクションの執筆にとっても力を入れ、後にレノマン夫人への手紙の中で「私の *Washington*」“*mon Washington*” (Witt 1884 299) と表現するほど気に入っていた。何故、ギゾーはそれほど *Washington* に執着したのだろうか。ギゾーは、*Washington* の序文で18世紀末アメリカ合衆国の英国からの独立を *civilisation* と捉えていた (Guizot 1840 52, 104, 110, 111)。1839年9月18日付スパークス宛ての手紙でもギゾーは下記のように述べ、ワシントンの功績は「近代 *civilisation* の偉大な出来事」としている (Adams 1893b 327)。

Je me félicite, mon cher monsieur, d'associer mon nom dans cette publication à celui de votre grand homme, plus grand encore que je ne le pensais avant de l'avoir considéré de pres Je vis avec lui depuis quelque temps, et c'est une noble et salutaire société. S'il avoit paru sur son compte en Amérique, ou sur l'histoire de votre Révolution en général, quelque chose de nouveau et d'un peu intéressant, vous seriez bien amiable de me l'envoyer. Je serois charmé d'avoir dans ma bibliothèque une collection un peu complete de documents et des ouvrages importants sur ce grand événement de la civilisation moderne.

「この出版物に私の名前をあなたの偉大な人物の名前に加えることを嬉しく思います。彼は、私が思っていたよりもさらに偉大です。私はしばらくの間彼のことを考えて暮らしてきました。それは私自身にとって有益な交わりの時でした。アメリカでの彼の演説や、アメリカの革命の歴史全般について何か新しくして少し興味深いものがあれば、それを私に送っていただけませんか。この近代の *civilisation* として偉大な出来事に私は喜んで取り組んでいます。」(河田訳)

ギゾーの序文は評価が高かったようである (Ticknor 157)。スパークスは公の場では微塵も不満も不快感も示さなかったが、彼の親しい友人たちは、彼は決してギゾーのやり方に納得していないことに気付いていた (Adams 1893b 319-333)。ギゾーの序文に対し、*New York Review XIII* (1840 275) は、「それは原著が優れているからに他ならない」という内容の短い書評を載せた。この一文は、誰によって執筆されたかは不明であるが、編集委員はホークス (Hawks) とヘンリーであるから、いずれかと推定できる。ギゾーの仏訳に対する抗議とも読めるので、ここに原文と筆者による訳文を載せる。

We hoped to be able to give our readers a paper upon the subject of this volume, suited to its interest and importance, but it came into our hands too late to allow us to do it justice. This essay in the original has gained for its author the admiration of Europe, and he has no occasion to fear that it will be less highly admired, by those who judge of it through the medium of the present translation. So entirely does it preserve the spirit and beauty of the original, and what is most difficult of all in such a labor, such is its success in retaining that happy adaptation of style to subject, which is one of the great excellences of the author's writings, that we doubt not, it would be difficult even for Mr. Guizot himself, to decide whether it is in its French or English dress, that his admirable work

appears to most advantage.

私たちは、この巻のテーマについてそれに見合った興味関心と重要性と共に、読者に一文を寄せたいと思っていました。しかし、私たちの手に入るのが遅すぎたために正当な評価をすることができませんでした。この元のエッセイは、既にヨーロッパでその著者への称讃を得ています。彼には、現存する翻訳の媒介を通してそれを評価する人々により、その称讃を貶める評価に遭う恐怖を味わうことがありませんでした。それ故、もし、原典の美しさと精神が全く保持されていなければ、それはこの種の仕事の中で最も困難なことであるが、この成功が幸福の内に収まることはなかったでしょう。それはその原典が持つ卓越性の一つであり、私たちは、それはギゾー氏には到達できないものだと確信します。そして、それはフランス語をまとおうが、英語をまよっていようが、その優れた仕事に最も与えられるべき優越性だと思います。(河田訳)

総じて、スパークスの著書 *Washington* の仏訳をめぐるギゾーとのやり取りは、ティクナーを仲介にした契約事項に則って実施したとはいえ、現代的な著作権という観点からすればスパークスの権利を侵害している。当時の人々も法的措置こそ取らなかったがスパークスの立場に立ち、抗議を表明したのである。

ティクナーは、前述のスパークスからの手紙を受け取った時も、1835年から家族でヨーロッパ各地に滞在し、政治家、小説家、芸術家、学者等と知己を広めていた。1838年8月はハイデルベルクに滞在し、8月24日に同地を発ち、9月18日にはパリに居た (Ticknor 1876b 104-105)。同年10月5日、翌6日にギゾーに会うために、プログリー家を訪ねた。10月9日には再びギゾー宅を訪問した。ティクナーは、「ギゾーは小さなアパルトマンに住み、生活は貧しく控え目であった。派手な客をもてなせるような家ではなかった。彼は大金を稼ごうとはしていなかった。彼はアメリカの政治的動向に少なからぬ関心を寄せていた。」(河田訳)と記している (Ticknor 85-86)。続けて、11月8日にもギゾー宅を訪れているが、その時の話題はもっぱら政治関係についてだった (Ticknor 1876b 89)。12月26日にもギゾー宅を訪れた時は、ラマルティース、ドゥカズ等の王政復古期の正理論派が集っていたと述べられている (Ticknor 1876b 98)。この後も1839年1月30日、2月3、5、6、9、17、26日、3月3、13、14日と、3月14日にパリを出発してロンドンに向かうまで、ティクナーは、頻繁にギゾーと会って文学から政治に至るまで幅広い会話を楽しんだようだ。

その後、スパークスは、1840年5月25日付の手紙で、ギゾーに自身のパリ行きを打診した。ギゾーの了解を得た模様で、スパークスは、1840年7月15日からヨーロッパ旅行に出発し、7月24日にマンチェスターに到着、8月1日に、フランスの在英外交官として同地に在住していたギゾーを訪ねた。ギゾーは、スパークスの研究に関心を持ち、毎日午前10時から11時までなら時間を取れるので、何度でも訪ねるよう促した。ホートン図書館所蔵のスパークスの日記から読み取ると、彼は、1840年10月6日にはロンドンからパリへ旅立ち、12月10日にはギゾーに手紙を出し、同月19日には、ギゾーと会食をした。スパークスのパリ滞在は、翌1841年2月末日までで、3月1日にはパリを出発して、3月4日にはロンドンに到着した。スパークスがギゾーへ送った手紙7通はホートン図書館に保存されており、その日付は、1840年5月25日、6月1日、12月10日、14日、1841年1月22日、3月1日、29日である。いずれも、ギゾーへの感謝の気持ちがあふれた内容になっている。特に1841年3月1日付の手紙には、ギゾーの助力により調査が無事終了したことへの感謝が綴られている。アダムスは、スパークスはこのパリ滞在中、ギゾーからアーカイブへのアクセス権を更新してもらったと述べている (Adams 1893b 543)。1849年、スパークスはハーバードカレッジの学長に選出された (スパークスの在任期間に、ハーバードカレッジは、ハーバード大学へ昇格した)。1852年9月8日ハーバード大学がギゾーに博士の学位を授与した旨を手紙で本人に伝えた。この手紙には、ギゾーが自著に寄せた序文に対する敬意と感謝が記されていた (Adams



1876b 467-468)。1858年、スパークス夫妻は、ギゾーとパリで再会した(Adams 1876b 552)。*Washington*の仏語訳が、ギゾーの娘婿ウィット(Witt)によって再版されたとアダムスは記している。前述のような事情はあったものの、ギゾーとスパークスの関係は生涯親密だったと考えられる。

### 3-2 トクヴィルとギゾー

トクヴィル(1805～1859)は、フランスの歴史思想家、政治家であり、*Democracy in America*の著者として世界的に知られている。1828年から30年にかけて、パリ、ソルボンヌ大学で開講されたギゾーの講義を学友ボーモンと共に聴講した(Craiuu 470-473)。ギゾーの*Histoire Général de la Civilisation en Europe*の講義は、1828年4月18日から14回の講義が毎週1回開講された(Guizot 1828)。同年12月からは、*Histoire de la Civilisation en France*という講義が1832年まで19回の講義が開講された。

トクヴィルは、ギゾーの講義について1829年7月18日のレクチャーノートで、「civilisationの歴史は全てを同時に包括する。人間は、その社会的存在を全ての観点から試される。歴史は人間の行動、習慣、意見、法律における知的発達の道筋を辿るべきであり、その知性の記念碑たるべきである。歴史とは、人間の内面に迫り、その環境の外側から与えられる外的影響の価値を判断する。別言すれば、それは、描かれなければならない期間における人間の全てなのだ。civilisationの歴史は、こうした関連事象の全てを表す要約の説明に他ならない」(河田訳)とギゾーの歴史の捉え方に感銘を受け、歴史学を学ぶことを決意した(Jardin 60 Mancini 17)。

トクヴィルは、内相モンタリヴェ伯爵の使命をうけてアメリカの刑務所制度の調査をするために、1831年5月から1832年2月まで、学友ボーモンと共にアメリカを調査した。1833年より*Democracy in America*を執筆し始め、1835年に刊行した。同年にメアリー・モットレイと結婚。同書は刊行と同時に称賛の的となり、1838年には道徳・政治学アカデミーのメンバーに選出された。以下クライウトウの著書(Craiuu)に依拠し、トクヴィルとギゾーの関係を述べる。トクヴィルは、政治家になることに野心的であった。1840年に同書の第2巻が刊行され、10月にチアーズ内閣が倒閣し、スールト・ギゾー内閣が組閣されると、トクヴィルは政治から疎外されるようになった。1842年彼は再び下院議員に選出され、マンシュの一般評議員となった。1843年、トクヴィルは、ギゾー内閣の政策に不満を募らせ、フランスの海上政策の失敗とイギリスの優位について憂慮する内容の6通の手紙をル・シエクルに送っていた。1848年2月ギゾー内閣が倒れるや第二共和政が宣言された。トクヴィルは再び下院議員に選出された。その選挙演説の中で彼は、イギリスの海上覇権に対抗するために米仏同盟の強化を主張した(Craiuu 5)。

### 3-3 スパークスとトクヴィル

前述のようにスパークスは、1828年、パリでの文書調査で初めてトクヴィルと出会った。スパークスがトクヴィルに送った手紙がホートン図書館文書「141g」に3通収録されている。その日付は、1836年7月5日、1837年6月6日、1840年9月5日である。最初の2通は、トクヴィルの著書の英訳は第1巻が1835年に、第4巻が1840年に出版されたが、アメリカでの出版が困難な点が説明されている。トクヴィルがスパークスへ送った手紙は、文書「153」に16通収録されている。日付が記されていないものもあるが、その日付は、収録順に列挙すると次のようになる。①不明 ②1831年12月16日、③1832年1月20日、④1832年1月26日、⑤1832年10月18日、⑥1832年12月18日、⑦183?年10月29日、⑧1835年9月11日、⑨1837年1月14日、⑩1837年6月6日、⑪1837年10月19日、⑫1839年8月4日、⑬1840年7月13日、⑭1840年10月19日、⑮1852年12月11日、⑯1857年7月15日。

以上の日付だけ見ても、1832年トクヴィルのアメリカ滞在中と*Democracy in America*出版前後に手紙が集中している。トクヴィルが死去する前年に送った手紙もあり、トクヴィルとスパークスとの関係

は終生続いて親密だったと考えられる。スパークスの 1832 年 1 月 20 日付日記に、「トクヴィルとボーモンというフランス人二人が 3 か月前から監獄のシステムと地方行政を調査するためにフランス政府に雇用され、アメリカに調査に来ている」と記されている (141j)。

### 3-4 ギゾーとヘンリーとの関係

ギゾーとヘンリーとの関係は、管見の限り、研究も言及もされていない。筆者は、スパークスがヘンリーにギゾーの著書の英訳の仲介したのではないかという仮説を立てたが、立証に足る資料は発見できなかった。スパークスとヘンリーとの間に交流があったことはスパークスからヘンリー宛の手紙が 2 通保存されていることからわかるが、そこにはギゾーの著書の翻訳については何も記されていない。Washington の仏訳独訳を巡っては著者自身が依頼をするために渡欧し、仲介者に依頼する等大変な苦労を重ねているのに対し、*Histoire général de Civilisation en Europe* については、翻訳者や出版社とのやり取り等は管見の限りギゾーやヘンリーの私的文書等のどこにも記録されていない。これは、同著が一般的な著作とは異なるルートで出版されたことを想像させる。

ヘンリーの経歴は、概ね次のようである。1884 年版 *The Literary World* によれば、ヘンリーは、1804 年 8 月 2 日にマサチューセッツ州ラットランドで生まれた。1825 年ダートマス大学を卒業。アンドーバーとニュー・ヘーブンで神学を学んだ。1828 年、マサチューセッツ州グリーンフィールドに住み、組合教会主義者の長を務めた。1831 年病気のため、職を辞し、ケンブリッジでリチャード・D・ダーナー一家に住みながら、哲学を学んだ。1833 年、ふたたび、ハートフォードの組合教会主義者の長となった。ニューヨークに転居し、エписコパル教会に赴任した。2、3 年後にプリストル大学で哲学の教授となった。1837 年にニューヨークに戻り、*New York Review* を創設し、ホークス博士を主筆に迎えた。1839 年ニューヨーク大学の史哲教授となり、1852 年まで在職し、一時期学長も務めた。1847 年から 52 年までクレメント教会のレクターとなった。1852 年以降は公的な職には就かなかったが文筆活動を行い、1870 年から 74 年まで聖ミシェル教会の主任司祭を務め、1884 年に没した (Abbott 114)。1842 年、ギゾーの *Histoire Général de la Civilisation en Europe* を翻訳した。以上の経歴からは、ギゾーと直接面識を持つような接点を見出すことは難しい。

ヘンリーは、1841 年 11 月にフランスのジュイリー (Juilly) カレッジで開講された授業の英訳をし、1869 年に *An Epitome of the History of Philosophy-Being the Work Adopted by the University of France* として出版している。彼は、フランスの大学における哲学の動向に目を向けていた。

ヘンリーは、ギゾーの英訳書の序文で「この著作が多くの教育機関で教科書として採用され、このような短期間で第三版が求められたことは、我国において好ましいことである。」「歴史を学ぶことは、より高等教育段階の教育コースで求められるものである。」と述べている。彼は、ギゾーの著書を高等教育機関の教科書として用いるために英訳したのである。

### 3-5 ヘンリーとスパークスとの関係

スパークスのヘンリーへの手紙は、1837 年 11 月 8 日付と 1839 年 2 月 20 付けの書簡である (ホートン図書館所蔵文書 141g)。前者では、Washington についてホークスが執筆したレビューが的外れであることに対するスパークスの憤りが綴られている。後者ではベンジャミン・フランクリンのラブレターに関する話に終始しており、ギゾーとは無関係の内容である。前述のように、1837 年にヘンリーは、ニューヨークに戻り、1839 年にニューヨーク大学の歴史哲学の教授に就任したのであるから、両者が近くに居住し、早くから知り合いであった可能性はある。

#### 4. *Histoire Général de la civilisation en Europe* 英訳本の種類と特徴

ギゾーの *Histoire Général de la Civilisation en Europe* を英訳したのは、ヘンリーが最初ではない。1842年にヘンリーの英訳が出版される前に下記のような英訳書が出版されている。

- ① M. Guizot, translated by Priscilla Maria Beckwith, *Lectures on European Civilization*, London: John Macrone, St. James's Square. (1837)
- ② M. Guizot, *General History of Civilization in Europe from the fall of the Roman Empire to The French Revolution*, Oxford: D.A.Talboys, London. (1838)
- ③ M. Guizot, *General History of Civilization in Europe from the fall of the Roman Empire to The French Revolution*, New-York: D. Appleton & Co., 200, Broadway. (1838)

1837年に出版された①は、プリシラ・マリア・ベックウィズ (Priscilla Maria Beckwith (1806-1877)) という女性によって訳され、出版者はジョン・マクロン社 (John Macrone)、ロンドンで出版された。翻訳者の序文と編集者の言葉が記されている。1838年に刊行された②と③では、出版社が異なる。②はオックスフォード・タルボーイズ社 (Talboys) から出版されているが、③はニューヨーク・アップルトン社から出版されている。②と③には同じ翻訳者序文が「1837年3月8日、オックスフォードにて」と付記されて掲載されている。その訳者序文には名前が明記されていない。1838年に刊行された英訳書②③は、二人の人物によって訳されたようである。訳者序文の後に、小さな文字で「本講義の最後の1、2講義は、他とは別の人物によって翻訳され、それを統合しようと注意深く校訂していることは付記すべきであろう」と記されている (Guizot 1838 viii)。前述オックスフォード・タルボーイズ社から出版された翻訳書と同じ訳者の序文が付いているが、最後の但し書きと日付の無い英訳書が1838年に、ニューヨーク・アップルトン社から出版されている。こうしたギゾーの英訳本の1837年から1871年までの変遷を可能な限り調査し、表1にまとめた。表1からギゾーの著書は、おそらく著作権が英国の出版社とアメリカの出版社でなんらかの契約が結ばれ、翻訳者を巻き込みながら版を重ね、翻訳者や序文を変えていったと想像される。

C. カーペンターは、1830年以前のアメリカでは初期英国で印刷された教科書が使用され、教育状態が悪かった。その状況を克服するために、ノア・ウェブスター、ジョン・フィルソン等がより良い教育をしようと立ち上がり、教科書作成に着手したと述べている (Carpenter 15-19)。ギゾーの著書は、こうした米国における教科書出版文化隆盛の波に乗ったと思われる。

1838年7月刊行の *New York Review III* に、*The General History of Civilization in Europe* がニューヨーク・アップルトン社から刊行されたことを称讚する記事が出ている (389)。1840年7月の同誌 XIII号には、“M. de Tocqueville's *Democracy in America*” と題した書評が16ページにわたって掲載された (233-248)。1830年代後半から1840年代にかけて英仏とニューヨークの知識人の間に緊密な学術情報網が結ばれていたことがわかる。

表 1. ギゾー *Histoire Généralde de Civilisation en Europe* の英訳本の変遷  
1837 ~ 1871

題名	刊行年	訳者・訳者序文について	出版社	出版地	所蔵
<i>Lectures on European Civilization</i>	1837	Priscilla Maria Beckwith 訳者序文と編者序文有。訳者序文の日付は、June 30 1837	John Macrone, St. James's Square	London	Yale University library, Google books
<i>General History of Civilisation in Europe, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1838	訳者序文があるが、記名無。訳者序文の日付は、Oxford, 8th March, 1837	Oxford: D. A. Talboys	London	Yale University Google books
<i>General History of Civilization in Europe, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1838	訳者序文があるが、記名無 序文の日付は、Oxford, 8th March, 1837	D. Appleton & Co.,	New-York	Yale University Library, Google books
<i>General History of Civilization in Europe, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1840	訳者序文があるが、記名無 序文の日付は、Oxford, 8th March, 1837	D. Appleton & Company	New York	Yale University Library
<i>General History of Civilization in Europe, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1842 1845, 1856, 1866, 1870	C. S. Henry 訳者序文の執筆者も C.S.Henry 訳者序文の日付は、June, 1842	D. Appleton & Company	New York	Yale University Library
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1846 1852	William Hazlitt Advertisement が無記名で有。 1846 年版には、ギゾーの半生と履歴紹介文が 15 ページにわたって掲載されている。執筆者は不明。	D. Appleton & Company	New York	Google books
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1846	William Hazlitt Advertisement が Hazlitt の署名入りで執筆されている。日付は、June 1, 1846	London : D. Bogue	London	Internet Archives
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1850 1854	William Hazlitt 訳者序文は C. S. Henry。訳者序文の日付は、June, 1842	D. Appleton & Company	New York	Google books
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1851	William Hazlitt Advertisement が Hazlitt の署名入りで執筆されている。日付は、June 1, 1846	David Bogue, Fleet Street.	London	Internet Archives
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1856	William Hazlitt Advertisement が Hazlitt の署名入りで執筆されている。	London H. G. Bohn	London	Internet Archives
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1856 1871	William Hazlitt 序文なし	BELL & DALDY, YORK STREET, COVENT GARDEN	London	Internet Archives Google books
<i>The History of Civilization, from the fall of the Roman Empire to the French Revolution</i>	1870	William Hazlitt ただし序文は C.S.Henry 執筆のもの	D. Appleton & Company	New York	Google books



## 5. 結論

以上の知見をもとに考察すると、ギゾーの大学での講義の名声は多くの人々に伝わり、欧米の知識人の交流を促し、その交流が同著の伝播を促進したと言える。他方、それと同時進行で交わされたスパークスの著書 *Washington* の仏訳をめぐるギゾーとのやり取りは、ティクナーが仲介したとはいえ、著作権の観点から公正とは言えないものであった。何故ギゾーはこのような行為をしたのだろうか。ギゾーの執筆した序文や日記等から、ギゾーは *Washington* を civilisation の好例と考え、強く執着していた様子が読み取れる。彼の長い序文や表紙に単独執筆者として自らの名前を載せることは、自らが考案した civilisation を体現したワシントンへの強い愛着の表れだったのではないか。この civilisation 思想の伝播の過程にも、一部にスタンダールが指摘した「欺瞞」や西欧知識人の「傲り」の香りが漂っていたことを筆者は残念に思う。

ギゾーの *Histoire Général de la Civilisation en Europe* は、2023年の現在に至るまで版を重ねて大きな影響を与えた続けている。ギゾーとヘンリーとの直接的な接点は見出せなかったため、おそらく同著は教科書として英米において複数の翻訳者に翻訳され、複数の出版社により版を重ね、ヘンリーも同著の英語訳を出版社から依頼され、教科書として翻訳したと考えられる。さらに言えば、ギゾーが同著の翻訳について言及していなかった点および著書による利益を得ているようには見えない程に質素な生活を営んでいた点から考え、ギゾー自身が教科書による自身の civilisation 思想の普及を最初から意図していたのではないかと筆者は考える。

ギゾーの civilisation 思想は、「社会の進歩と人間性の進歩」を謳い、多くの称讃と批判を浴びたギゾー個人から離れて教科書として独り歩きし、近代国家建設期にある国々の人々の心を直接的あるいは間接的に捉え、その力を発揮したと考えられる。

(本研究は学術振興会科学研究費助成基盤研究 (C) (2019～2023年度)「ギゾーと幕末日本—文明論のグローバルな影響—」(研究代表者 河田敦子)の助成を受けている。)

## 註

- 1) *Histoire de la Civilisation en Europe* と表記されている著書もある。
- 2) 本稿では civilisation を「文明」とは訳さず、フランス語の civilisation と表記して用いる。日本語の「文明」には、「技術的・物質的所産」の意味が含まれ、ギゾーの意図することと若干異なると筆者が考えるからである。
- 3) <https://worldcat.org/identities/lccn-n82-234510/> (2023. 3. 20 閲覧)

## <参考文献>

- 1) Abbott, B.V. *The Literary World*, Apr. 5, Vol.15 (7), 1884, p.114
- 2) Adams, Herbalt. B. *The Life and Writings of Jared Sparks: comprising selections from his journals and correspondence*. Vol.1, Boston: Houghton, Mifflin, 1893a
- 3) Adams, Herbalt B. *The Life and Writings of Jared Sparks: comprising selections from his journals and correspondence*. Vol.2, Boston: Houghton, Mifflin, 1893b
- 4) トーマス・バックル著 土居光華・萱尾奉三訳『英国文明史』宝文社 1879年
- 5) Bullen, R. « La politique étrangère de Guizot, » Valensise, M. *Colloque de la Fondation Guizot-Val Richer- François Guizot et la Culture Politique de Son Temps*, Gallimard le Seuil, 1991
- 6) C.Carpenter, *History of American Schoolbooks*, University of Pennsylvania Press, 1963
- 7) Craiutu, Aurelian and Jeremy Jennings edited and translated, *Tocqueville on America after 1840, Letters and Other Writings*. Cambridge University Press, 2009

- 8) 後平隆「ギゾー、福沢、トクヴィル 1」『慶応義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』46 2008年
- 9) 後平隆「ギゾー、福沢、トクヴィル 2」『慶応義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』49、50 2009年
- 10) 後平隆「ギゾー、福沢、トクヴィル 3」『慶応義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』52 2011年
- 11) 後平隆「ギゾーの文明論 (3)」『慶応義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学』44 2007年
- 12) フランソワ・ギゾー著 安士正夫訳『ヨーロッパ文明史』みすず書房 2014年
- 13) Guizot, F. *Vie, correspondance et écrits de Washington publiés d'après l'édition américaine et précédés d'une introduction...* par M. Guizot. Librairie de Charles Gosselin, 1840
- 14) Guizot, F. *Cours d'histoire moderne. Volume 1*, Paris. Pichon et Didier, Éditeurs, 1828
- 15) Guizot, F. *General History of Civilization in Europe*, New-York: D. Appleton & Co., 200, Broadway. 1838
- 16) Guizot, F. translated from the French by C.S. Henry. *General History of Civilization in Europe*, D. Appleton & Co., New York. 1842
- 17) Jardin, André. translated from the French by Lydia Davis with Robert Hemenway. *Tocqueville -A Biography by André Jardin*. Peter Halban, London, 1988
- 18) Johnson, Douglas. *Guizot-Aspects of French History 1787-1874*. Greenwood Press. 1963, 1975
- 19) 河田敦子『教員の「公務員」性成立をめぐる歴史の国際比較』科研費報告書 2019年 a
- 20) 河田敦子「フランス近代公教育制度ゴブレ法制定過程における初等公教育教員の『国家公務員』化」『東京家政学院大学紀要』第59号 2019年 b
- 21) 小田中直樹著『フランス近代社会 1814-1852』木鐸社 1995年
- 22) Mancini, Matthew. *Alexis de Tocqueville and American Intellectuals*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc. 2006
- 23) 丸山真男『「文明論之概略」を読む 下』岩波新書 2017年 (初版は1986年)
- 24) Mayer, Brantz. *Memoir of Jared Sparks, LL.D.* printed for the Maryland Historical Society, by John Murphy. Baltimore, 1867
- 25) 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』平凡社 2013年
- 26) Oliphant, Laurence. *La Chine*; traduction nouvelle précédée d'une introduction par M. Guizot, Paris : Michel-Lévy frères, 1860
- 27) 尾崎芳治「マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論 (1)」『経済論叢』77 (5) 京都大学経済学会 1956年
- 28) クリスチャン・ポラック『網と光 知られざる日仏交流 100年の歴史』アルシェット婦人画報社 2002年
- 29) Poulot, D. « L'archéologie de la civilisation. » Valensise, Maria. *Colloque de la Fondation Guizot-Val Richer- François Guizot et la Culture Politique de Son Temps*, Gallimard le Seuil, 1991
- 30) Sparks note (Houghton Library). 141g (1839.Sept.18), 141j (1832.Jan.20)
- 31) Theis, Laurent. *François Guizot*, Fayard 2008
- 32) Ticknor, George, *Life, letters, and journals of George Ticknor vol.1*, James R. Osgood and Company, Boston, 1876a
- 33) Ticknor, George, *Life, letters, and journals of George Ticknor vol.2*, James R. Osgood and Company, Boston, 1876b
- 34) 梅津順一『「文明日本」と「市民的主体」—福沢諭吉・徳富蘇峰・内村鑑三 (聖学院大学研究叢書)』聖学院大学出版会 2001年
- 35) Valensise, M. *Colloque de la Fondation Guizot-Val Richer- Francois Guizot et la Culture Politique de Son Temps*, Gallimard le Seuil, 1991
- 36) Mme de Witt, nee Guizot, *Lettres de M. Guizot à Sa Famille et à Ses Amis*, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1884
- 37) Witt (Henriette Elizabeth, Madame de), translated by Mary Charlotte Mair Simpson, *Monsieur Guizot in Private Life. 1787-1874*, Boston Estes and Lauriat, Publishers, 1881, translated in English in 1923

- 38) 安川寿之輔『日本近代教育の思想構造』新評論 1970 年  
39) *New York Times* (1857-1922), Jan21, 1899. (Houghton Library 所蔵)  
40) *New York Review*, vol. III, 1838  
41) *New York Review*, vol. VIII, 1839  
42) *New York Review*, vol. XIII, 1840
- 
- (受付 2023.3.23 受理 2023.7.6)

